INDC—IAEA第5回会合出席報告

百田光雄（日本原子力研究所）

IAEAのINDSWG（International Nuclear Data Scientific Working Group）は1963年から1965年にかけて4回の会合を行ない，原子力開発の基礎となる核データの分野での国際協力を推進するための方策を討議し，その討議の結果にもとづきIAEA内に設置されたNuclear Data Unitの運営に関し，IAEA に助言するという機能をはたしてきた。この国際協力は参加各国の熱意と協調とにより着々と軌道が整えられ，爾後IAEAの事業として永続的に行なう基礎が固められたので，昨年秋東京で行なわれたINDSWG 第4回会合で，INDSWGを従来の特別委員会（会合の期間だけ委員が指名されていた）から常置委員会に改めることが討議された。これがIAEA 当局により採り上げられ，INDSWGは今年からInternational Nuclear Data Committee(INDC)という名称に改められることになつた。最初の2年間（1966～67)の日本からの委員として筆者が指名された。

INDC の通算第5回の会合は先月（10月）25～28日の間ウインで行なわれ，議長はインドのDivatia 氏，新しい顔ぶれとしては，Bretscher氏にかわりRac とKinchin（UK）の両氏，Sala氏にかわりEvangelisti 氏（Brazil）が出席し，今回もまたAustraliaからSymonds 氏がobserver として出席した。なおScientific secretary の West cott氏（Canada)はGood 氏（USA）に交代した。

今回の会合では，前回の東京会合以後のIAEA Nuclear Data Unit (NDU)の活動状況の報告とそれに関する討議と，INDC の性格，構成，運営に関する規程の討議とが主な内容であつた。その要点は以下のようなものである。

IAEA・NDU の使命は，既に度々紹介されているように，核データに関する国際協力を推進，或は実施することにある。その具体的な活動の一つとしてCINDA活動がある。即ちIAEA・NDUに既に約1年前から，ソ連，インド，ポーランド，オセアニア地域のCINDA—readersとの連絡業務と，またNDU 自身でもCINDA—readingの作業とを行なうことにより，アメリカ合衆国とENEA の二つのデータセンタのサービスエリアになつていない地域の文献をCINDAに報告し，またこれ等の地域に対するCINDAサービスを行なつている。即ちIAEA・NDU はCINDAに関しては，USA のオークリッジ，ENEA のサクレーの両センターにならんで，第三のセンターとしての機能を確立した。

次にIAEA・NDU に対するもう一つの大きな課題である核データそのものの集収と流通については，NDU は，ブルツクヘブン（米，カナダ）サクレー（ENEA）オブニンスク（ソ連）以外の

地域に対するデータセンタとなることゝ，これらのセンター間におけるデータの交換を促進するという二つの使命を与えられている。しかしこれ等の仕事は，言語の相異，各国の事情に帰因する歩調の合わせにくさなどのために進展がはかばかしくなかつたが,最近に到りNDU ではDASTAR と称するdata storage and retrieval systemを作り，この使命に向つて一歩を踏み出した。このDASTAR は出し入れできるデータの形式は全く自由であることが特徴である。（これは出し入れするデータの量が多くなると重大な困難を引きおこす原因となるであろうが，事情の異つた色々な国を対象とするIAEA としてはそれでもやむを得ぬことであろう。）
DASTAR は今のところ発足したばかりで未だごく少数のデータが入つているだけであるが，今後充実のための努力が行なわれるであろう。

次にINDC の性格，構成，運営に関する"委員会規程"とも称すべきものの案が米国から提案されたが，その内容の骨子は，まず第一にINDC の"自治"の範囲を出来るだけ大きくしようということと，第二にINDC のメンバーを約15とし，そのうち米，ソ連，英国，フランス，インドの6ケ国を常任国に，その他の国々については任期を3年として参加国の交替をはかろうとするものであるが，第二の点については多くの異論が出された。またIAEA 当局の見解は，この二つの問題或いは各国の利害が交錯し，或いはIAEA の運営全般とも関係するので，慎重にとりあつかうべきであり，論議するのに時期尚早であるということであつた。

次回の会合は明年5月頃ソ連邦内で行なわれることになつた。

〔附記〕 DASTAR に入つているデータのカタログが筆者の許にきている。DASTAR についてはもう少し説明資料が来るのをまつて，後日改めて紹介したい。